

「目指せ！サステナブル ライフ」

ロクスひよりやま de 聖年 ワークキャンプ

体 験 記

2025年7月4日（金）～7月6日（日）

広島教区 平和の使徒推進本部

「ラウダート・シ」デスク 主催

スタッフ Sr. 京嶋千早 SND de N

ロクスひよりやま de 聖年 ワークキャンプ

7月4日（金）から6日（日）に聖年ワークキャンプが、広島教区「ラウダート・シ」同伴司祭中井淳s.j.の拠点である下関市のロクスひよりやまで、行われました。

参加者は、広島教区内と福岡・大阪・横浜・東京教区からも来てくださり、スタッフ合わせて、11名でした。特に、今回は、信徒7名、修道者3名、司祭1名となり、共に歩むシノダリティ（共働性）の実践の場にもなったように思います。

このワークキャンプは、祈りの雰囲気の中で、体験活動を通して、エコロジカルな霊性を学ぶ目的で企画され、司祭の講話や分かち合いだけでなく、畑仕事や野菜中心の料理など体験活動の多いプログラムでした。

例年より3週間くらい早く、7月早々に梅雨が明けてしまい、雨の日用のプログラムも準備していたのですが、急遽、暑さ対策もしっかりして、病気やケガなく楽しく過ごし、実り豊かなワークキャンプとなるよう神様の守りと導きを心から祈っていました。



目指せ！サステナブル ライフ

持続可能な生活様式へのシフトが求められている現代社会において、なかなか変えられない自分のスタイル。日常から少し離れて、祈りの雰囲気の中で、自然とのふれあいを通して、エコロジカルな霊性を学んでみませんか。



7/4 金 15:00 ~ 7/6 日 15:00

申込締切
6/17(火)
定員10名

募集要項

- 同伴司祭 中井 淳 師 (イエズス会)
- テキスト『エコロジーに向かう回心のための霊的な旅路』エリック・シャルムタンs.j. 他著 2024年
- 参加費 13,000円 (学生割引あり)
- 持ち物 『ラウダート・シ』・筆記具
作業着・エプロン・洗面具・着替え 他

開催地

〒750-0019 山口県下関市丸山町 5-3-25
ロクスひよりやま / JR下関駅より徒歩20分

お問合せ

広島教区 平和の使徒推進本部
「ラウダート・シ」デスク
E-mail: info@social-desk.net
☎ 080-1913-3756 (わたり) ▼お申込み ▲
<https://forms.gle/UiHRvGh48zDpkz2K6>



7/4 (金) 木の下にて ～聴く人になる

木々の樹冠の下に立って風が鳴らす様々な音を聞き、溪流を流れる急流の水音を聞き、平地を行くかすかな水の流れを聞いて、その音がどれも神の話し声であり、美しさの根源ともいえるほどの暗い声を聞き分けることこそが楽園を再発見することだろう。ヘルマン・ヘッセ『ペーター・カーメンツィント』

快晴の夏空の元、ワークキャンプは、オリエンテーション・自己紹介、中井神父様の講話で始まりました。神父様は、ヘルマン・ヘッセの作品などから、自然、すなわち、神の被造物に耳を傾けることを教えてくださいました。
(右の写真：6月21日、下見の時、ひよりやま公園で撮影)

夕方、関門海峡の見える聖堂でのミサ、そして、夕食作りとなりました。メニューは、玄米ご飯、野菜の重ね煮、オカラと大豆ミートのハンバーグ、野菜サラダに味噌汁などです。みんなの合作ですから、どれも味わい深かったです。

夕食後、映画「医師 中村哲 働くということ」を鑑賞しました。彼は、1984年からアフガニスタン難民の医療支援のため、パキスタンに赴任し、ハンセン病患者の治療や予防のための「靴工房」の立ち上げ、山岳地帯の無医村訪問、そして、干ばつに苦しむ人々のために用水路の建設をしました。「誰も行かぬから我々が行く。誰もしないから我々がする」という言葉が、心に響きました。中村医師は、苦しむ現地の人々の話に真摯に耳を傾け、その問題を解決しようと献身した人でした。

聖堂で「寝る前の祈り」をして、消灯となりました。心を静め、夜闇の関門海峡を眺めていると海風に乗って上空を飛ぶドラゴンの翼音と「ヴフォー！」と低いななく声が聞こえるという話を思い出しながら、船の汽笛の音は、聞こえるけれど、ドラゴンが来るかな・・・と想像しつつ、眠りにつきました。



7/5 (土) Great Works 宇宙と人間との関係を正していく

宇宙がどのように生じたのか、太陽系と地球がどのように生まれたのか、惑星としての地球で生命がどのように発展を遂げて、ついに私たち自身が出現するようになったのか、そしてこの驚くべき過程の中で、私たち人間の役割は何であるかを私たちは知らなければなりません。物理的なプロセスだけでなく、霊的なプロセスという点で。 トマス・ベリー評伝



爽やかな海風が心地よい早朝6時から、ワークパーティ（畑仕事）をしました。まず、草取り、次に、3本の畝にナス、落花生、オクラの苗を植え、合間の4つの溝にミニひまわりを1本ずつ移植し、夏野菜の収穫をしました。そして、神父様から、畑を見守る「結び目を解くマリア」像や赤毛のアンの家とリンゴの木、ブランコにレモンの木、たい肥置き場だった所に逞しく伸びているカボチャや高校生が植えた梨の木など畑エリアについて、エピソードを聞きました。

朝食は、日帰りの参加者が、焼いてくれたパンと庭で取れたブラックベリーに昨晚作った豆乳ヨーグルト、新鮮野菜のサラダなどです。もぎたてのトウモロコシの甘かったこと！

講話②では、テイヤール・ド・シャルダン神父とトマス・ベリー神父の「大いなる仕事」について、私たちは、「宇宙と人間との関係を正していく」必要があること、そして、アルペ神父様の言葉から、あらゆるものに神様はおられることを教えていただきました。

ネイチャーゲームは、暑さを避けるため、室内と庭畑を行きつ戻りつして、4つのアクティビティを行いました。最後の「わたしは山」では、窓越しに各自が、心惹きつけられる場所に座って、気に入った自然物になってみます。その後、一人ひとりが、パステルカラーの紫陽花や大家さんの木、海などになりきって、被造物と会話したり、感じたりしたことを分かち合いました。

講話③では、アシジの聖フランシスコの三位一体の神の眼差しについて、エロワ・ルクレールの著書より、神父様がアシジに巡礼された話とからめて、お話しいただきました。ラヴェルナ山やサン・ダミアノ教会など聖フランシスコの晩年に思いを馳せました。

夕方のミサ後は、庭でピザ・パーティとなりました。ピザシートにのった、様々なトッピングが楽しく、また、ピザ窯での焼き立てピザは、とてもおいしく、広い夕空と海峡の夜景に見守られながら、開放的になり、話が弾んで、時間が経つのも忘れませんでした。片付けの前に、星空の下で、ランタンを囲みながら、寝る前の祈りをした静かなひと時も印象に残りました。



7/6（日）緑の力（ヴィリディタス）

ベネディクト会修道士にとって、ガーデニングは平等に誰もが行うもので、配慮と敬意を必要とする行為であり、そこでは庭師の道具は、神殿の器と同等の尊敬の念をもって取り扱われることになっていた。

（中略）精神生活は、大地との関係の上にしっかりと根を張っていないといけないという聖ベネディクトの信念によっていた。スー・スチュアート・スミス著『庭仕事の神髄』

快晴の朝、少しゆっくり起きて、野菜の水やりや昼食に使うシソの葉を収穫しました。

講話④は、『庭仕事の神髄』より、宗教とガーデニングの話でした。聖マリリウスが、司教職につまづいた時、庭師として働くことを通して神との関係、人との関係を修復した話や聖ヒルデガルトの緑の力についてです。ヴィリディタスは、ラテン語の緑と真実の合成語で、エネルギーの源です。彼女は、緑の力を思考の中心に据え「自然の世界が繁栄している時にのみ、人間も繁栄し、地球の健康と人間の肉体的、精神的健康とは切っても切れない関係にある」（p.35）と考えました。締めくくりに、神父様は、洗足式のミサで聞いた説教、田んぼの泥が足のしわの一部になっている農家のおばあちゃんの足の話から、インスピレーションを得て生まれた曲、「Footprint」をギター伴奏で歌ってくださいました。そして、各自、画用紙に、自分の理想の庭園「心のガーデニング」を描くことになりました。

昼食づくり、5分づき玄米のちらし寿司をいただいた後、派遣ミサとなりました。「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。」（ルカ10・3）とイエス様は言われ、私たちもイエス様が行くつमोरの町に派遣されました。奉納の時、一人ひとり庭園の絵に込めた思いを語り、祭壇に奉献しました。その絵は、このワークキャンプのまとめであり、これからの生活のヴィジョンになるものです。「緑の力」を考え方の基盤にしていこうという決意と、ここでの体験活動や参加者同士の関わりから生まれた内的なエネルギーを大切に、イエス様の弟子として、これからも創造的に生きていけるよう祈りました。

5



後 日 談 ～ひまわりの話

「ひまわりの花は、一日じゅう太陽に向かって咲き、陽とともに花もまわります。純真な人は、いつも神を中心に行動し、神からすばらしい導きと恵みをいただきます。こういう人は、いつも美しく新鮮で清らかな愛情にあふれています。」 聖ジュリー・ビリアート

帰宅後、ワークキャンプでの体験を振り返っていると、ふと、友人が作って歌っていた曲「ふたりで見る空は」のメロディが浮かんできました。

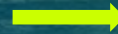
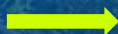
「ふたりで見る空は、一人の時よりも、青くて美しい。不思議な気持ちで全てのものが輝いて見える。心に喜びが満ちているから。

ふたりで見る海は、一人の時よりも、広くてやさしい。不意義ね、ふたりで分かち合えば」

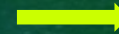
関門海峡を見下ろす丘にあるロクスひよりやまから見える青い空と海、町の風景や朝夕の潮風、そして、解散時のみなさんの晴れやかな笑顔を思い出しました。スタッフとしては、至らない点多々ありましたが、中世の修道者のように祈り、そして、互いに交わりながら体を動かすことで、心身共にリフレッシュし、とても元気になりました。ドラゴンは、目には見えなかったけれど、確かに聖霊の風となって、私たちの心の中に飛び込み、ダイナミックに駆け巡って、みんなを活性化させ、吹き抜けていった！と感じました。

数日後、神父様から、ミニひまわりが咲きましたとのお知らせが、写真付きで届きました。実は、このひまわりは、2月の長束黙想会で、ひまわりの絵を描き「ひまわりを植えたい」と分かち合ってくださった参加者が、4月下旬に修道院に種を持って来られ、一緒に鉢や土の準備をし、シスターたちで、種まき・水やり・鉢分け・追肥などをして育ててきたものなのです。一般に、ひまわりは、植え替えを嫌う植物なので、内心、持って行って、大丈夫かな？という思いもあり、「神様、きれいな花を咲かせてください」と心から祈っていました。

ですから、2月にライフデザインとして画用紙に描いたひまわりの花、主の奉献の祝日のミサで捧げた絵を、神様は、しっかり受け取ってくださり、ロクスひよりやまで、実際に花開かせてくださったことが、何より嬉しかったです。悲しいことや辛いこともある日常の中で、善き神様は、確かに私たちを導いてくださっていると実感した出来事でした。



6



癒しの庭園作り

～修道院編

いのちとは何かという原理、「暮らすことが、土を作ることとイコールになれば、それだけで生きものを増やすアクションになる」

四ツ井真治著 『地球再生型生活記』

土を作って暮らしていけば、それだけで、いのちを育むプロセスに参加していることになるのか！ この気づきが、今回のワークキャンプの大きな収穫でした。それは、自分のしてきたことは間違っていなかったという確認であり、「これからも、その路線でいいよ。」という励ましにもなりました。

私事ですが、昨年末、突然入院し、余命半年と宣告されていた母が、4月の聖週間に危篤となり、姉弟と交代で施設にいる母の枕元に座りました。その間、苦しそうに呼吸する母の前では、食欲もなく、時々声をかけたり、ロザリオの祈りを唱えたりしていました。そして、聖木曜日の晩に、亡くなったのですが、納棺式や葬儀ミサでは現実感覚がなく、自分も、あの世とこの世の間をふわふわとさまよっているような感じになってしまいました。

その状態のまま、修道院へ戻ったタイミングで、ひまわりの種をいただき、種蒔きと同時にたい肥作りも始まりました。昼間に高齢のシスターや信徒の方々が、抜いた庭の雑草などを一か所に積み上げ、それらを刃渡り15cmくらいの剪定バサミで短く切っていきます。そして、周りの土を掘り、その土を葉っぱや枝にかぶせていく作業です。土の中にいる微生物が、植物の分解を促進します。夕食後、暗くなっていく庭の片隅で、ひたすら働きます。

今日は、みなさんが、こんなに草抜きしてくださったのか！という感謝の念。そして、土がかぶさった植物の破片の山を前にして、「確実に燃やすゴミを減らしている！」という充実感がありました。地球から見れば、大海の一滴にもならない、とてもわずかな二酸化炭素排出削減の行為が、なぜか、とても清々しく、心爽やかなのです。また、毎日、7種類のひまわりの成長を見守りつつ、世話することは、楽しく、創造主のすばらしさに気づかされます。さらに、水やりのため、ホースを持ち、消防隊員のように引っ張りながら庭を歩き回っている時は、自分の足が地についている感覚がありました。

落ち葉や刈った芝、剪定した木の枝など、たい肥作りの作業は、まだまだ続きます。この頃は、暑さが厳しくなると共に蚊に刺されることもあり、だんだんと早寝早起きにシフトし、早朝の作業になってきました。庭には蝶やハチが飛び、鳥のさえずりも心地よいです。もし数か月後に、たい肥ができ上がったら、来年は、トウモロコシを植えてみようかしらと思いながら、修道院での癒やしの庭園作りは、どんどん夢がふくらんでいきます。

